The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	植民地インド史の翻訳 : サイイド・ハーシミー・ファリーダーバーディー『インド史』（1920-22年）を読む
Author(s)	宮本, 隆史
Citation	外国語教育のフロンティア. 2023, 6, p. 117-132
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/91033
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

研究ノート

植民地インド史の翻訳：サイイド・ハーシミー・ファリーダーバーディー『インド史』（1920-22 年）を読む

Translating History of Colonial India: Sayyid Hāshimī Farīdābādī's Tārīkh-e Hind (1920-22)

宮本　隆史

要約

This study examines the context and structure of a four-volume textbook, Tārīkh-e Hind (first edition 1920-22; second edition 1939), written by Sayyid Hāshimī Farīdābādī (1890-1964). Farīdābādī wrote this history textbook a few years after he joined the Translation Bureau of the Osmania University in Hyderabad state. It was one of the first historical narratives written in Urdu prose in princely states under British rule. He considered the presence of Anjuman-e Taraqqī-e Urdū, led by Abdul Haq (1870-1961) in Aurangabad, of great importance.

The reader can see a will to depart from the British colonial narrative in Farīdābādī's History of India. He criticised previous colonial historiographies written in English, for their judgement of Aurangzeb's personality or the causes and consequences of the so-called 'Black Hole of Calcutta' incident. However, it is clear that Farīdābādī's historiography had to rely heavily on those colonial historiographies for historical sources and writing style. This paper shows that while his historiography relied on English sources and their writing styles, he prepared his readers with the means to deconstruct colonial narratives.

キーワード：歴史叙述、教科書、ハイダラーバード藩王国、ウルドゥー語

1. はじめに

本稿の目的は、サイイド・ハーシミー・ファリーダーバーディー（Sayyid Hāshimī Farīdābādī, 1890-1964）が著した『インド史（*Tārīkh-e Hind*）』（初版 1920-22; 第 2 版 1939）のテクストの文脈と構造を読み解くことにある。ファリーダーバーディーは、ハイダラーバード藩王国のウスマーニーヤ大学の翻訳所に勤務しはじめてから数年後にこの歴史教科書を著した。これは、イギリス支配下の藩王国においてウルドゥー語散文で書かれた歴史叙述のひとつとして、史学史・教育史的に興味深いテクストである。また、当時のハイダラーバード藩王国では、アブドゥル・ハック（'Abd al-Ḥaqq, 1870-1961）指導下のウルドゥー発展協会（Anjuman-e Taraqqī-e Urdū）が活動を展開しており[1)]、ファリーダーバーディーもまたそれに深く関わっていたことから、ウルドゥー文学史上も注目に値する。

彼の『インド史』については、ハイダラーバード藩王国の教育史に注目しムスリムの世俗的言説の展開を論じたダトラーが注目しているが（Datla 2013: 95-104）、テクストの構造の検討は十分にしておらず、本稿で行なっておく価値があると考える。

以下では、2 節でファリーダーバーディー『インド史』が書かれた歴史的文脈を確認するため、ウスマーニーヤ大学における教材翻訳事業と、そこで翻訳・著作を行なったファリーダーバーディーについての基本的情報を確認する。これを踏まえたうえで、3 節で『インド史』の読解を行なう。最後に、4 節で議論のまとめと今後の課題を提示する。

2. テクストの文脈

2.1 藩王国におけるウルドゥー語の歴史叙述

英領インドのイギリス人官僚知識人たちは、インドには歴史叙述の伝統が不在だとし、イギリス支配下の「文明化」のプログラムによって、より近代的な学知として歴史が与えられるのだと主張した。典型的な植民地的インド史叙述においては、インドの過去はヒンドゥー時代（古代＝黄金期）／ムスリム時代（中世＝暗黒期）／イギリス時代（近代）に区分された。インドの知識人たちは、こうした植民地の知の枠組みに強く影響されながら、自らのアイデンティティ模索と重ね合わせて歴史を叙述した。そうした歴史叙述の媒体として、教科書が 19 世紀末より存在感を増すことになる。19 世紀後半の英領インドの教育においては英語教材が重視されたが、初等・中等教育のためにウルドゥー語を含む現地語での現地語教材の作成も行なわれ、歴史教科書も多く書かれることになったからである[2)]。

一方で、イギリスの宗主権のもとで限定的とはいえ内政権を認められた藩王国では、それぞれの教育行政が行なわれ、デカン[3)]高原中央に位置したハイダラーバード藩王国においても独自の教育行政がなされた。ハイダラーバード・ニザーム国は、デカン長官であったニザームル・ムルク（Nizām al-Mulk, 1671-1748）が 1724 年にムガル皇帝の支配下から脱して統治を開始した、いわゆるムガル継承国家のひとつである。マラーター戦争に巻き込まれて 1798 年にイギリスの保護下に入った後は、最大の藩王国でありつづけた。住民の大半はヒンドゥーであったが、世襲的にニザーム（Nizām ＝宰相）を名乗った統治者はムスリムであった。ニザームの宮廷では、当初はペルシア語・アラビア語が重視されていたが、第 2 代のニザーム・アリー・ハーン（Nizām ‘Alī Khān, 1734-1803）の治世下で、ウルドゥー語が奨励されるようになった。

シェーシャンは、1850 年前後までのハイダラーバード藩王国では、大衆のための公教育政策はほぼ存在しなかったとしたうえで、その後の藩王国の教育史を大きくふたつの時期に分けている。サーラール・ジャング 1 世（Mīr Tarāb ‘Alī Khān Sālāl Jang Avval, 1829-1883）が、主席大臣（ṣadar al-mahāmm）として藩王国行政の改革を進めた 1853-83 年の時期には、藩王一族や貴族の子弟に英語教育をほどこすことが重視された。彼の死後の 1883-1918 年の時期には、公教育の充実がハイダラーバード藩王国の課題と位置付けられるようになった（Seshan 2018: 168）。さらに大きな教育史上の画期となったのは、最後のニザームであるミール･ウスマーン･アリー･ハーン（Mīr ‘Uthmān ‘Alī Khān, 1886-1967）の名を冠した、ウルドゥー語を教育言語とするウスマーニーヤ大学（Osmania University）の創設（1918 年）である。このウスマーニーヤ大学において、多様な教科の教科書がウルドゥー語訳され、あるいは新たに執筆された（Datla 2013: chaps. 1 and 2）。同大学には、ウルドゥー発展協会の会長アブドゥル・ハックの指揮に

より、1917 年に翻訳所（dār al-tarjumah）が設置され、数々の教材がウルドゥー語に訳されはじめた。ダトラーによると、1919-24 年のヒラーファト運動期に、ハイダラーバード藩王国政府は訳書ではない独自の教科書を作成することとしたが、すべての教科書を自前で用意しようとしたわけではなく[4]、歴史教科書に特にねらいを定めた。その理由とされたのは、インドとイスラームの歴史については、翻訳する価値のある英語の本が存在しないというものであった。もちろん、インド史・イスラーム史の書籍はそれまでに多く英語で書かれており、ダトラーの指摘するように「翻訳する価値のある本」がないという評価はこのとき選び取られたものであった（*Ibid*. 83）。この命により、『過ぎ去りしラクナウー』に代表される歴史的随筆や数々の歴史小説などの著作ですでに名を成していた晩年のアブドゥル・ハリーム・シャラル（‘Abd al-Ḥalīm Sharar, 1860-1926）[5]が、2 巻の『イスラーム史（*Tārīkh-e Islām*）』（Sharar 1925; 1926）を著わした。一方で、まだ若手であったサイイド・ハーシミー・ファリーダーバーディーに、『インド史』4 巻の執筆が任されたのである。

2.2 ファリーダーバーディーの著作活動

ファリーダーバーディーは、ムガル朝のアクバルとジャハーンギールの治世に活躍したシャイフ・ファリード・ブハーリー（Shaikh Farīd Bukhārī）の一族の出身とされる[6]。シャイフ・ファリードは、現在のハリヤーナー州にある都市ファリーダーバードを建設したことで知られる。ファリーダーバーディー自身も、この地に 1890 年に生を受けた。彼は、デリーの「アラビック・ハイスクール」とマドラサで教育を受けたのち、アリーガルで学士号を取得する。1917 年にウスマーニーヤ大学に設置された翻訳所に、創設当初から翻訳者のひとりとして着任し[7]、そこで主に歴史関連の書籍を英語からウルドゥー語へ訳す任にあたった。1934 年には翻訳所を離れ、1939 年まで藩王国政府内務相の補佐役（madadgār-e mo‘tamad-e ‘adālat o kōtwālī o ta‘līmāt）を務めた。

1912 年にウルドゥー発展協会の会長にアブドゥル・ハックが就くと、協会の拠点がハイダラーバード藩王国のアウランガーバード（Aurangābād）に移され、ファリーダーバーディーも翻訳所での仕事のかたわら活動に関わった。1938 年に協会がデリーに拠点を移すと、ファリーダーバーディーもアブドゥル・ハックに招かれてデリーに居を移し、協会の活動に尽力することになる。しかし、1947 年のインド・パーキスターン分離独立の影響で協会は両国のあいだで分裂し、アブドゥル・ハックは 1948 年にカラーチーに移って協会を再建した。彼に再び呼ばれたファリーダーバーディーは、1949 年にカラーチーに移住し、協会の運営や機関誌の編集・執筆に大きく貢献した。しかし 1954 年にアブドゥル・ハックとの関係が悪化すると、ファリーダーバーディーは協会と袂を分かってラーホールに移住する。その地で彼の主著として記憶されることになる『ラーホールの輝かしき事蹟』（Farīdābādī 1956）を出すことになる。最期の時は、1964 年 7 月 19 日にラーホールの自宅で迎えた。

確認できる彼の最初の著作は、『古代ギリシア史』（Farīdābādī 1918）である[8]。翌年には、J. B. ビューリー（John Bagnell Bury, 1861-1927）の『ギリシア史』（Bury 1900）のウルドゥー語訳（Farīdābādī trans. 1919a）と、プルタルコスの『対比列伝』の英訳からのウルドゥー語訳（Farīdābādī trans. 1919b）を出している。1920-22 年にかけて、本稿で検

討する教科書『インド史』（Farīdābādī 1920）の執筆を行ない、1925/26 年（ヒジュラ暦 1344 年）には『中央インド史』（Farīdābādī 1925/26）を世に出している。1929 年には、ビューリーの『ローマ帝国史』（Bury 1893）のウルドゥー語訳（Farīdābādī trans. 1929）を出した。また、1930/31 年（ヒジュラ暦 1349 年）に詩集『ハーシミーの 3 つのナズム』（Farīdābādī 1930/31）も発表した。1930 年には、C. A. ファイフによる『ヨーロッパ近代史：1792-1878 年』（Fyffe 1924）の第 3 巻のウルドゥー語訳（Farīdābādī trans. 1930）、35 年には翻訳所員であったカーズィー・タランムズ・フサイン（Qāẓī Talammudh Ḥusain）との共訳で同書の第 2 巻のウルドゥー語訳（Ḥusain and Farīdābādī trans. 1935）、翌 36 年にファイフの書の続編として G. P. グーチが書いた『ヨーロッパ近代史：1878-1919 年』（Gooch 1923）のウルドゥー語訳（Farīdābādī trans. 1936）を出している[9]。1930 年代のあいだは、『ヨーロッパ近代史』シリーズのほかに、W. H. モアランド（William Harrison Moreland, 1868-1938）によるインド経済史『アクバルからアウラングゼーブまで』（Moreland 1923）のウルドゥー語訳（Farīdābādī trans. 1931）、J. ファーガソン（James Fergusson, 1808-1886）による『インドと東洋の建築史』より第 7 章「インド・イスラーム建築」（Fergusson 1876: Book 7）[10] のウルドゥー語訳（Farīdābādī trans. 1932a）、英国の東洋学者 G. L. ストレンジ（Guy Le Strange, 1854-1933）の『ムスリム支配下のパレスチナ』（Le Strange 1890）のウルドゥー語訳（Farīdābādī trans. 1932b）、E. マーズデン（E. Marsden）と A. スミス（Alford Smith, 1864-1936）による地理教科書『上級クラスのための地理』（Marsden and Smith 1921）のウルドゥー語訳（Farīdābādī trans. 1932c; 1934）[11]、C. ランサム（Cyril Ransome, 1851-1897）による教科書『上級イングランド史』（Ransome 1907）のウルドゥー語訳（Farīdābādī trans. 1937; 1941）、M. ピクソール（Marmaduke Pickthall, 1875-1936）がフランス語から英訳したという『オスマン朝史』（La Jonquière 1914; 英訳の書誌は不明）のウルドゥー語訳（Farīdābādī trans. 1938; 1939）を続けざまに出している。さらに同時期には、自身の『インド史』の第 2 版の準備も進めていた（Farīdābādī 1939abc）。1940 年には、ムハンマド・ハイダル（Muḥammad Ḥaidar）およびムハンマド・アブドッサッタール（Muḥammad ‘Abd al-Sattār）との共訳で、ジェイムズ・フィッツジェイムズ·スティーヴン（James Fitzjames Stephen, 1829-1894）による『ナンダクマールとイライジャ・インピー卿の弾劾』（Stephen 1885）のウルドゥー語部分訳（Ḥaidar, Farīdābādī and ‘Abd al-Sattār trans. 1940）[12] を出した。この年には他に、ボンベイのエルフィンストン・カレッジの歴史学教授であったシドニー・オーウェン（Sidney James Owen, 1827-1912）の『イギリスによる征服前夜のインド』（Owen 1872）のウルドゥー語訳（Farīdābādī trans. 1940）、ペルシアの神秘主義詩人ルーミー（Rūmī, 1207-1273）の物語集のウルドゥー語訳の監修（Labīb（translation）and Farīdābādī（revision）1940）を行なっている。しかし、これらの翻訳書を出したあとは、1940 年代は目立った著作を遺さなかった。分離独立後にパーキスターンに移住してからは、1952-53 年にかけて『パーキスターンとバーラトのムサルマーンたちの歴史』2 巻（Farīdābādī [1952]; 1953a）を世に出し、53 年にはウルドゥー発展協会の 50 周年を記念して『ウルドゥー発展協会の歴史』（Farīdābādī 1953b）と『「ウルドゥー」誌傑作選』（Farīdābādī 1953c）を編纂する。1954 年には、ウルドゥー発展協会への最後の貢献となる、フィリップ・フーリー・ヒッティー（Philip Khuri Hitti, 1886-1978）による『アラブ人の歴史』（Hitti 1937）をウルドゥー

語訳（Farīdābādī trans. 1954）する。ラーホールに移り住んだあとの 1956 年には、高い評価を受ける『ラーホールの輝かしき事蹟』（Farīdābādī 1956）を出す。1959 年には、ジョゼフ・コトラー（Joseph Cottler）とハイム・ジャフ（Haym Jaffe）による大衆向けの歴史読み物『文明の英雄たち』（Cottler and Jaffe 1931）をウルドゥー語訳（Farīdābādī trans. 1959）している。1962 年には、作家ハロルド・ラム（Harold Albert Lamb, 1892-1962）による大衆向け歴史読み物『バーブル』(Lamb 1961)のウルドゥー語訳(Farīdābādī 1962a)と、ザキー・ナギーブ・マフムード（Zakī Najīb Maḥmūd, 1905-1993）による『エジプトの大地と人びと』（Mahmoud 1959）のウルドゥー語訳（Farīdābādī trans. 1962b）を出している。

1910 年代から 1940 年までの前期ファリーダーバーディーの訳書･著書のほとんどは、ウスマーニーヤ大学出版局から出され、翻訳・執筆は主に翻訳所の公務として行なっていた[13]。主題に注目すると、1910 年代末から 20 年代末までは古代ギリシア･ローマ史、並行して 1920 年代前半のインド史、1930 年代にはヨーロッパ近代史、インド史、パレスチナ史、地理、イングランド史、オスマン朝史など広範な主題の翻訳･著作を行なった。1850 年代からの後期ファリーダーバーディー作品は、分離独立を経験したディアスポラ作家としての著作群として理解できる。パーキスターンの誕生を受けた歴史の再解釈、自身と同様に分断と移動を経験したウルドゥー発展協会の歴史、移住先のラーホールの歴史を書いている。

3. ファリーダーバーディー『インド史』の読解

3.1 ファリーダーバーディー『インド史』の文献学的整理

ファリーダーバーディーの『インド史』にはいくつかの版がある。最初に、高等教育（intermediate）用の歴史教科書として、1920-22 年に 4 巻本で出された（Farīdābādī 1920; 1922）。大幅な加筆修正がほどこされた第 2 版は、1937 年にやはり 4 巻本で出版されている（Farīdābādī o Ṣiddīqī 1937a; 1937b; 1937c）。これとは別に、1930 年には「高等マドラサ（madāris-e fauqānīyah）」用の教科書として三分冊合本で（Farīdābādī 1930）、1937 年にもまた三分冊合本でハイスクール（matriculation）用の教科書（Farīdābādī 1937）が作成されている[14]。

以下では、高等教育（intermediate）用の『インド史』の内容を検討する。それに先立ち、本稿の文献学上の限界を確認しておきたい。本稿執筆に際して確認できたのは、残念ながら初版の第 1・4 巻、および第 2 版の第 2・3・4 巻のみである。ダトラーの先行研究では、初版の第 2 巻と、第 2 版の第 1・3・4 巻を参照して、その内容の詳細な検討を試みている（Datla *op. cit.*）。しかし、第 2 版の表題紙には、当時ウスマーニーヤ大学で講師として教鞭を取っていたアブドゥル・マジード・スィッディーキー（‘Abd al-Majīd Ṣiddīqī）の名が第 2 版改訂者として記されている。ダトラーが指摘するように第 2 版ではかなりの加筆修正がほどこされているが、これが原著者のファリーダーバーディーによるものなのか、あるいはスィッディーキーによるものなのか明らかでない。このように取り扱いに注意を要するテクストであるため、本来はふたつの版の個別検討が不可欠であろう。しかし、現状ではどちらの版も全体像を明らかにできていないため、ダトラーが試みるような踏み込んだ内容分析は文献調査をさらに進めた後に可能になるものと考えている。ただし、初版第 4 巻と第 2 版第 3・4 巻を照らし合わせる

と、歴史叙述のプロット自体は大きく変わっているわけではないようである。そこで本稿では、詳細な内容分析は将来の課題としつつ、初版第 1 巻と第 2 版第 2・3・4 巻を参照して、歴史叙述の構造を確認することとする。

3.2 ファリーダーバーディー『インド史』の叙述構造

初版 1 巻は、「ヒンドゥー時代」を扱ったものと位置づけられている[15]。第 1 章（Farīdābādī 1920: 1-13）では、まず序論においてインドの歴史の単位の問題を指摘する。先行する歴史叙述では北インドが過大に重視されてきた一方で、「アーリヤ人」の移住以前にはドラヴィダ系の人びとが先住していたことを指摘する。しかし、彼らもまたインドの外から移住してきたとすることで、本来の「インド史」の主体が誰なのかを定義することの困難さを示す。さらに、イギリス支配以前に亜大陸全体を統治した国家が存在しなかったことから、「インド史」の地理的枠組みを自明視することも難しいことが示される。そのうえで、歴史叙述の典拠として、韻文の歴史物語、宗教書、碑文・貨幣、「外国人」による記録、ギリシア語の典籍、ムスリムによる歴史書などがあることを述べる。つまり、「インド史」を本質化して語ることについての懐疑を表明したあとで、歴史を「実証的に」叙述するための根拠を確認しているのである[16]。第 2 章（*Ibid.*: 14-35）では、第 1 節で紀元前 6 世紀の古代国家群の叙述からはじめ、第 2 節でマガダ国の興亡、第 3 節で当時の社会と経済についてまとめている。つぎの第 3 章（*Ibid.*: 36-53）では、第 1 節でアーリヤ人の初期の信仰からヴェーダの宗教までを概述し、第 2 節でジャイナ教、第 3 節で仏教についてまとめている。第 4 章（*Ibid.*: 58-79）では、第 1 節でアレクサンドロスの「ヒンドゥスターン」侵攻への流れ、第 2 節で彼のヒンドゥスターンでの戦闘、第 3 節でその撤退について語られる。第 5 章（*Ibid.*: 80-94）は、マウリヤ朝のチャンドラグプタ（Candragupta）の治世の記述にあてられ、第 1 節では『アルタシャーストラ』の編纂と領土拡張、第 2 節では統治制度の整備について記述されている。第 6 章（*Ibid.*: 95-109）は、アショーカ（Aśoka）の治世に関する章で、第 1 節ではカリンガ征服から、仏典結集、碑文の建立について、第 2 節では文化と対外関係、第 3 節では彼の私生活と後継者について、最後にマウリヤ朝の滅亡までを述べている。第 7 章（*Ibid.*: 110-141）では、第 1 節でシュンガ朝からアーンドラ朝（サータヴァーハナ朝）までの王朝の流れを追い、第 2 節でバクトリア、パルティア、セーティーなどの北方からの勢力の侵攻を整理、第 3 節でクシャーナ朝のカニシカ王（Kaniṣka）の治世について言及し、さらに補遺でヒンドゥスターンへの外来民族の影響を論じる。第 8 章（*Ibid.*: 142-168）ではグプタ朝期の記述を行なっており、第 1 節でその統治と社会の記述、第 2 節で 宗教と学芸について述べ、第 3 節で「フン（Hun）」（エフタル）の侵攻とグプタ朝の滅亡を語ったうえで、補遺ではカーリダーサ（Kālidāsa）とその詩歌に触れる。第 9 章（*Ibid.*: 169-193）は、ヴァルダナ朝期についての叙述で、第 1 節でハルシャ（Harṣa）王の治世について、第 2 節で 玄奘とその『大唐西域記』について、第 3 節で同時代の社会、芸術、宗教などについて述べたうえ、補遺でプラーナなどのヒンドゥーの文献についての考察を行なう。第 10 章（*Ibid.*: 194-222）は、北インドを中心とした諸国家の記述にあてられ、第 1 節でカシュミールとネパール、第 2 節で 北インドのカンナウジ（Qannauj）やブンデールカンド（Bundhēlkhaṇḍ）などの小国家、第 3 節で ラー

ジプートとベンガルのラージャーについて述べている。第 11 章（*Ibid.*: 223-248）は南インドの状況にあてられ、第 1 節でデカンのチャールキヤ（Chālukiyah）朝の興亡、第 2 節でチョーラ（Cola）朝の支配、第 3 節でチョーラ朝支配下の秩序と芸術活動について述べている。

第 2 版 2 巻では、ムガル期以前の王朝として、デリー・サルタナットを中心とした歴史が記述されている[17]。第 1 章（Farīdābādī 1939a: 1-41）では、デリー・サルタナットの興りが叙述される。第 1 節でこの時期を「イスラームの征服」の時代と位置づけてクトゥブッディーン・アイバク（Qutb al-Dīn Aibak）の侵攻から語りはじめ、第 2 節でシャムスッディーン・イルトゥトミシュ（Shams al-Dīn Iltutmish）の支配とモンゴルの脅威について、第 3 節でイルトゥトミシュの後継者たちについて述べている。第 2 章（*Ibid.*: 42-80）は主にギヤースッディーン・バルバン（Ghiyāth al-Dīn Balban）の時代を描く。第 1 節でバルバンの政治的台頭を説明し、第 2 節ではこの時期のインドにおけるイスラームの学問と文化の発展を描いたのち、第 3 節でバルバンの後継者たちについて述べ、補遺では「ヒンドの鸚鵡（Tōtī-e Hind）」と呼ばれたアミール・フスラウ（Amīr Khusrau）について論じる。第 3 章（*Ibid.*: 86-146）ではデリー・サルタナットの拡大が叙述される。第 1 節でハルジー朝によるグジャラートとデカンの征服、第 2 節のトゥグルク朝の支配期についてはデカンでの展開にも紙幅を割く。第 3 節ではトゥグルク期の終わり以降に、デカン、グジャラート、マールワーなどに独立的な勢力が現れた一方で、経済や学芸の発展があったことを述べる。第 3 章補足（*Ibid.*: 147-180）では、デカンのバフマニー朝の諸王の名と統治期間、南インドのヴィジャヤナガル王国の諸王を並べて紹介している。

第 3 巻は主にムガル朝を中心に叙述している。初版ではムガル期の 18 世紀の衰退までを、第 2 版ではイギリス東インド会社のベンガル地域でのディーワーニー獲得までを記述している。第 1 章（Farīdābādī 1939b: 1-41）はムガル朝の開始期を描く。第 1 節でバーブル（Bābur）のインド侵攻、第 2 節で北インドの諸勢力とフマーユーン（Humāyūn）の戦い、第 3 節でシェール・シャー（Shēr Shāh）の台頭とムガル勢力の撤退について述べられる。第 2 章（*Ibid.*: 42-95）ではアクバル（Akbar）によるムガル朝支配の確立を描く。第 1 節で彼のグジャラート、ラージプーターナ、ベンガルなどへの征服戦争、第 2 節で彼の統治下での国制の確立、第 3 節で宗教と学問の繁栄について語るなかで特にペルシア語と「ヒンディー語」（ブラジ・バーシャー）の詩作に言及する。第 3 章（*Ibid.*: 96-166）ではムガル朝の絶頂期を叙述する。第 1 節ではアフマドナガル、ゴールコンダ、ビージャープルなどの諸王朝に触れてデカンの政治的状況を説明し、第 2 節でアクバルのデカン征服について記述する。第 3 節はジャハーンギール（Jahāngīr）とシャージャハーン（Shāh Jahāṇ）の治世についての記述である。デカンでの戦争やハーン・ジャハーン・ローディー（Khān Jahāṇ Lōdī）の反乱などに触れるものの、比較的あっさりとした記述になっている。一方で、第 4 節のアウラングゼーブ（Aurangzēb）については皇子時代と皇帝時代に分けて詳細に叙述しており、先行の歴史書では彼の人格について不当に厳しい評価がされているとし、第 3 章補足で資料を示して補っている（*Ibid.*: 167-169）。そのうえで、彼とシヴァージー（Shivājī）率いるマラーターとの戦争、そしてデカンの征服について記す。第 4 章（*Ibid.*: 170-216）ではアウラングゼーブ没後

のムガル皇帝たちを中心に叙述する。第 1 節ではムガルの文化と社会を概観し、第 2 節で「無能な皇帝」たちの失政とナーディル・シャー（Nādir Shāh）の侵攻までを述べ、第 3 節でアフマド・シャー・ドゥッラーニー（Aḥmad Shāh Durrānī）の攻撃とムガル帝国の衰退が描かれる。第 5 章（*Ibid.*: 217-255）[18] はムガル衰退後の新興勢力について述べている。第 1 節ではペーシュワー（宰相）政権下での マラーターの隆盛を述べ、第 2 節ではハイダラーバードのアーサフ・ジャーヒー（Āṣaf Jāhī）朝の独立とハイダル・アリー（Ḥaidar ‘Alī）によるマイソール王国の統治を説明、第 3 節ではベンガル太守、アワド太守、パンジャーブのスィク王国など北インドの諸勢力の台頭が描かれる。第 6 章（*Ibid.*: 256-285）[19] ではヨーロッパ人のインド到来について叙述している。第 1 節では 西洋諸国の海洋貿易の展開、第 2 節では初期のイギリス東インド会社について、第 3 節ではフランス人のインド到来を述べている。第 7 章（*Ibid.*: 286-300）は、ごく手短に東インド会社のベンガル統治の開始までを描く。東インド会社とベンガル太守スィラージュッダウラ（Sirāj al-Daulah）の敵対、スィラージュッダウラに捕らわれた捕虜が大量に死亡したという「ブラックホール」事件、プラッシーの戦い、そしてミール･ジャアファル（Mīr Ja’afar）の太守即位にいたる 1757 年の一連の事件が記述される。そして、1764 年のミール・カースィム（Mīr Qāsim）の太守即位とバクサルの戦い、翌 65 年のムガル皇帝から東インド会社へのディーワーニー（司法徴税権）の付与が一息に語られる。ブラックホール事件はインドの後進性を示す逸話として度々取り上げられるが、誤った解釈であるとして英語の歴史書を批判する。

第 4 巻では、イギリスのインド支配期を叙述する。第 1 章（Farīdābādī 1939c: 1-25）[20] では、第 1 節イギリス東インド会社によるベンガルのディーワーニーの獲得、第 2 節ウォレン･ヘイスティングズ（Warren Hastings）による支配領域拡大とその統治、第 3 節コーンウォリス（Cornwallis）時代のマイソール戦争と統治確立、さらにジョン・ショアー（John Shore）の時代までを書いている。第 2 章（*Ibid.*: 26-56）[21] では、東インド会社のインド支配の拡大を描く。第 1 節ではウェルズリー（Wellesley）時代の第 4 次マイソール戦争での勝利、ハイダラーバード・ニザーム国の藩王国化、第 2 次マラーター戦争、バーラトプル包囲戦の失敗、ボーンスレー家との戦闘での勝利が記述される。第 2 節ではウェルズリー退任からミントー総督時代（Minto）までの統治制度の整備、第 3 節ではヘイスティングズ（Francis Rawdon-Hastings）時代のピンダーリー戦争やシンガポールの占有について描く。第 3 章（*Ibid.*: 57-96）[22] では、さらなる統治領域拡大と東インド会社解散までを叙述する。第 1 節では、第 1 次ビルマ戦争から、ベンティンク総督時代のサティー禁止や英語による教育の導入といった内政面の「改革」、そしてタグ鎮圧やアフガーン戦争などの経緯を記す。第 2 節では、ハーディング（Hardinge）からダルハウジー（Dalhousie）の総督時代の、二次にわたるスィク戦争とパンジャーブ併合、ナーグプルとアワド藩王国の併合が語られる。第 3 節では、1857 年の「暴動（hangāmah）」と会社統治の終結が手短に記述される。第 4 章（*Ibid.*: 97-120）[23] では、大反乱後のキャニング（Canning）からチェルムズフォード（Chelmsford）までの総督の統治を駆け足でまとめ、1919 年のアムリットサルにおけるジャリヤーンワーラー・バーグ虐殺事件までを記述している。第 5 章（*Ibid.*: 121-130）[24] は、第一次世界大戦後の時代を記述する。モンタギュー＝チェルムズフォード改革以降の政治的運動、とりわけヒラーファト運

動と国民会議派の運動、そして英印円卓会議など、1936年までの政治動向を記述している。最後の第6章（*Ibid.*: 131-150）[25]では、植民地統治下における教育の歴史を述べる。1813年インド統治法から、英語と西洋の知識を重視する教育政策の確立を経て、教育制度が整えられていく過程を描く。そのうえで、伝統的な道徳観や思想などに対する西洋の知識の優勢を、現状の問題として提示する。第2節では、法と統治の原理の説明として、英領インドの憲政史をまとめ、最後に「州自治」を付与することを謳った1935年インド統治法に関する解説を行なって叙述を閉じている。

3.3 テクストの特徴

英語で書かれるインド史の教科書では、冒頭に自然地理学的な説明を置き、英領インドの空間をまず定義するという語り口がよく見られる。たとえば、イクバールとプラシャードの『インド史』はその型に明確にしたがっていた（Iqbāl and Prashād 1913: chap 1）。ファリーダーバーディー『インド史』はそうした仕掛けを採用せず、むしろ何らかの本質を持つ「インドの歴史」を語ることの困難を冒頭で暴露してしまう。しかし、本書の主要な情報源が先行の歴史書であることも明らかである。南インドとデカンに関する記述を厚くしようとする努力が全体的に見られるものの、結果的には北インドに重心が置かれている。

一方で時間の単位は、基本的には西暦が使われているが、デリー・サルタナット諸王朝やムガル朝の歴史を叙述する際にはヒジュラ暦と西暦を併記している。ハイダラーバード藩王国が公式文書で使っていたファスリー（faṣlī）暦は記されていない。時代区分に関しては、ヒンドゥーの古代（初版1巻）、ムスリムの中世（第2版2・3巻）、イギリスの近代（初版4巻、第2版3・4巻）という構成をとっており、典型的な植民地的歴史叙述の型を踏襲している。この時代区分は、執筆に先立って前提とされていた可能性がある。翻訳所の報告書にはつぎのように記されており、「ヒンドゥー時代」「ムガル時代以前の時代」などの執筆計画があらかじめ与えられていたのかもしれない。

> サイイド・ハーシミー氏は、原資料〔original sources〕から（intermediateクラス用の）インド史をまとめるよう指示されている。彼は、本年初旬を資料収集とペルシア語・英語の歴史書を読むために使った。彼はヒンドゥー時代〔Hindu period〕とムガル時代以前の時期の一部を書き終えており、ウルドゥー語で印刷すれば700ページを超えることになろう。[26]

なお、「マラーター時代」に一章を割くイクバールとプラシャード『インド史』（Iqbāl and Prashād *op. cit.*）の構成とは異なり、シヴァージーとマラーターの扱いは本書では比較的小さい。この背景には、ハイダラーバード・ニザーム国がマラーターと対立した歴史があるのかもしれない。

4. おわりに

ファリーダーバーディーの『インド史』では、イギリス植民地主義の歴史叙述から脱却しようとする意志を読み取ることができる。アウラングゼーブの治世の評価や、カ

ルカッタのブラックホール事件の解釈など、植民地の歴史叙述によってなされてきた一方的な評価に対して批判的な解釈を提出しようとしている。その一方で、ファリーダーバーディーの歴史叙述の構造や情報源は、英語でそれまでに書かれてきた歴史叙述に大きく依存せざるを得ないことも明らかであった。

1857 年の大反乱の取り扱いの小ささもまた注目に値する。反英闘争が盛り上がっていた執筆時の言論環境では、1857 年の出来事を「独立戦争」と位置づけるナショナリスト的解釈は珍しいものではなかった。しかし、ファリーダーバーディーはそうした解釈を採用してはいない。同じように 1857 年大反乱を矮小化する記述を行なった 1913 年のイクバールとプラシャードには、親英的身振りを示す理由があった（宮本 2022: 326）。ところが、ファリーダーバーディーの場合は、植民地主義の歴史叙述の枠組みに懐疑的な態度を示しており、親英的身振りを強調することが彼にとって重要だったとは考えにくい。

植民地統治者による歴史叙述の枠組みに批判的でありつつ、英語の歴史書に依存せねば歴史が書けないという状況にファリーダーバーディーは置かれていた。本の冒頭でのインド史の不可能性についての指摘は、「事実」という部材によって緻密に構築されているかのように見える植民地的インド史の物語が、自ら解体するように促す仕掛けとして配置されたのではないか。構築物としての歴史を解体する叙述戦略は、「独立戦争」を通じて新たなインド史の物語を作ろうとする、ナショナリズムの言説とも相性が悪いものだったのかもしれない。

このことを検討するためには残された課題は多い。第一に、ファリーダーバーディー『インド史』の初版と第 2 版をすべて並べて文献学的に吟味する作業はいまだ行なわれていない。また、本稿では高等教育版のみに注目したが、中等教育版との比較も行なう価値がある。加えて、ファリーダーバーディーによる近い主題の著作でありながら、政府の命によって書いたのではない『中央インド史』『パーキスターンとインドのムサルマーンの歴史』などとの比較検討も行なうことが望ましい。さらに、シャラルの『イスラーム史』や、同時期に書かれた他のインド史の教科書との比較検討、あるいはポスト植民地国家の教材における歴史叙述との通時的な比較も有用だろう。ファリーダーバーディーの一連の歴史叙述は、今後のさらなる検討の可能性に開かれている。

謝辞

本稿の草稿について北田信先生より貴重なご助言をいただいた。また、ファリーダーバーディーが訳したオスマン史に関して、文献学的な事実を小野亮介氏にご教示いただいた。ここに感謝の意を表したい。本稿の内容の誤りについては筆者がすべての責を負う。

注

1）ハックとウルドゥー発展協会については黒柳［1962］が紹介している。

2）この段落で述べた内容については宮本［2022］でまとめた。

3）日本語では「デカン」の文字があてられることが多いが、これは英語つづりの「Deccan」をそのままカナ読みしたものが広まったもので、現代のウルドゥー語／ヒンディー語では

「dakkan」「dakkhan」と発音される。

4）たとえば、1925-26年の翻訳所では92冊が翻訳中で、その主題は、工学33冊、医学12冊、哲学15冊、歴史・政治・経済その他が16冊であった。*Annual Administration Report of the Osmania University for the year 1335 Fasli/1925-1926*（1927), p. 10.

5）シャラルの伝記としては、Raẓā（1989）、Aḥmad（1989）などがある。

6）カラーチーのウルドゥー発展協会（Anjuman-e Taraqqī-e Urdū）の機関誌『国民の言語』（*Qaumī Zabān*）が1964年12月に出した追悼特集号に収録されているタフスィーン・サルワリーの文章がファリーダーバーディーの人生について詳しい（Taḥsīn Sarwarī 1964）。

7）翻訳者の給料は、初任給Rs. 300～最高額Rs. 500（年間昇給額Rs. 40）であった。1919/20年に、初任給Rs. 350～最高額Rs. 600（年間昇給額Rs. 25）と増額され、ウスマーニーヤ大学カレッジの1級助手（1st Grade Assistant Professor）並みとなる。Report on the Working of the Translation Bureau of the Osmania University for the year 1329 Fasli, in *Annual Administration Report of the Osmania University for the year 1329 Fasli/1919-1920*（1923), p. 1. ただし、1923-24年には、1級翻訳者（初任給Rs. 350～最高額Rs. 600）と2級翻訳者（初任給Rs. 250～最高額Rs. 400）に区分された。このときファリーダーバーディーの名は、1級翻訳者として筆頭に挙げられている。*Annual Administration Report of the Osmania University for the year 1333 Fasli/1923-1924*（1925), p. 6.

8）*Urdū Nāmah*誌20号のファリーダーバーディーの追悼記事は、完全でないながらも著作目録を著書、論文、ナズム（詩）に分類して掲載している（Taraqqī-e Urdū Bōrḍ 1965: 49-52）。本稿では特に書籍をとりあげて紹介する。

9）ファイフの本の初版は1886年に3巻本として出版され、1889年に第2版が出ており、さらにグーチが1923年にその続編を出している。それら4冊は本稿で挙げている1924年の合冊版（uniform edition）に収録されている。なお、ファイフの本の第1巻は、カーズィー・タランムズ・フサインが1935年に単独で訳出している（Ḥusain trans. 1935）。

10）この本は、James BurgessとRichard Phené Spiersによって増補され、1910年に2分冊で出されている（Fergusson, Burgess and Spiers 1910）。

11）マーズデンという人物の詳細は明らかにできていないが、原書の標題紙には「王立地理学協会員、元インド教育局員」とある。スミスは、ロンドン近郊の聖ダンスタン・カレッジ（St. Dunstan's College）で教鞭を取った地理学者である。

12）原書は2巻本であるが管見の限りではウルドゥー語訳は1巻しか確認できていない。

13）ただし、自著である『中央インド史』と詩集は、ウスマーニーヤ大学出版会からは出されていない。これらの著作の位置づけは改めて検討したい。

14）ダトラーは1927年の高等マドラサ用教科書を参照しているが（Datla 2013: 208）、筆者は確認できていない。当時のハイダラーバード藩王国の教育制度は、初等教育（primary education）、中等教育（secondary education）、大学教育（collegiate/university education）に区分され、中等教育はMiddle SchoolとHigh Schoolとに区分されていた。High Schoolの卒業時にmatriculation試験が課され、大学教育に進むと2年後にintermediate試験が、さらにその2年後に学士号試験が課されることになっていた（Mackenzie and Khan 1936: 18）。ファリーダーバーディーの『インド史』は、intermediateレベルの教科書として作成され、その後High Schoolの生徒用も作られたのである。

15）ウスマーニーヤ大学の報告書でもそのような位置づけが示されている。Report on the Working of the Translation Bureau of the Osmania University for the year 1329 Fasli, *op. cit*, p. 2.
16）ダトラーは、第2版になると、モーヘンジョーダローの遺跡発掘といった、「科学的」手続きが強調されるようになることを指摘している（Datla *op. cit.*: 100）。
17）筆者は初版2巻を確認できていないが、第1巻とのつながりから判断して第2版第2巻と同様に初版もデリー・サルタナットから記述が始まるのではないかと思われる。
18）初版の4巻1章（Farīdābādī 1922: 1-30）に対応する。
19）第2版6・7章の記述は、初版の4巻2章（*Ibid.*: 31-53）に対応する。
20）初版の4巻3章（*Ibid.*: 54-85）に対応する。
21）初版の4巻4章（*Ibid.*: 86-115）に対応する。
22）初版の4巻5章（*Ibid.*: 116-153）に対応する。
23）初版の4巻6章1節（*Ibid.*: 154-174）に対応する。
24）この節は初版の出版以降の時期を扱ったものであり初版には存在しない。
25）初版の4巻6章2・3節（*Ibid.*: 174-186）に対応する。
26）丸括弧は原文。亀甲括弧は原文を示すため筆者が付けた。Report on the Working of the Translation Bureau of the Osmania University for the year 1329 Fasli, *op. cit*, p. 2.

参考文献

ファリーダーバーディー関係の文献

■ファリーダーバーディー『インド史』

Farīdābādī, Sayyid Hāshimī

1920　*Tārīkh-e Hind, kitāb-e avval*（*barā'e inṭarmīḍī'yaṭ*）, Maṯbū'ah-e Dār al-Ṯab' Sarkār-e 'Ālā, Ḥaidarābād（Dakkan）.

1922　*Tārīkh-e Hind, kitāb-e cahārum, barā'e inṭarmīḍī'yaṭ*, Dār al-Ṯab' Jāmi'ah 'Uthmānīyah Sarkār-e 'Ālā, Ḥaidarābād（Dakkan）.

1930　*Tārīkh-e Hind,*（*barā'e madāris-e fauqānīyah*）, Dār al-Ṯab' Jāmi'ah 'Uthmānīyah Sarkār-e 'Ālā, Ḥaidarābād（Dakkan）.

1937　*Tārīkh-e Hind, ḥiṣṣah-e avval, dūwum*, *sivum*（*barā'e mēṭrik*）, Dār al-Ṯab' Jāmi'ah 'Uthmānīyah Sarkār-e 'Ālā, Ḥaidarābād（Dakkan）.

Farīdābādī, Sayyid Hāshimī（tālīf）o 'Abd al-Majīd Ṣiddīqī（nazar-e thānī tab'-e dūwum）

1939a　*Tārīkh-e Hind, jild-e dūwum*（*barā'e inṭarmīḍī'yaṭ*）（*tab'-e dūwum*）, Maṯbū'ah-e Dār al-Ṯab' Sarkār-e 'Ālā, Ḥaidarābād（Dakkan）.

1939b　*Tārīkh-e Hind, jild-e sivum*（*barā'e inṭarmīḍī'yaṭ*）（*tab'-e dūwum*）, Maṯbū'ah-e Dār al-Ṯab' Sarkār-e 'Ālā, Ḥaidarābād（Dakkan）.

1939c　*Tārīkh-e Hind, jild-e cahārum*（*barā'e inṭarmīḍī'yaṭ*）（*tab'-e dūwum*）, Maṯbū'ah-e Dār al-Ṯab' Sarkār-e 'Ālā, Ḥaidarābād（Dakkan）.

■ファリーダーバーディーのその他の単著書

Farīdābādī, Sayyid Hāshimī

1918　*Tārīkh-e Yūnān-e Qadīm,* Maṯba'-e Insṭīṭyūṭ 'Alīgaṛh Kālij, 'Alīgaṛh.

1925/26 *Tārīkh-e Hind, Wasṯānīyah,* A‘zam Isṭīm Prēs Gavarnmanṭ Ejūkēshōnal Prinṭar, Ḥaidarābād (Dakkan).

1930/31 *Seh Nazm-e Hāshimī, n.p.*, [Ḥaidarābād (Dakkan)].

[1952] *Tārīkh-e Musalmān-e Pākistān o Bhārat (Hind), jild-e avval: “‘Ahd-e Kishwar Kushā’ī”* (*Muḥammad ibn Qāsim sē Aurangzēb ‘Ālamgīr tak*), Anjuman-e Taraqqī-e Urdū Pākistān, Karāchī.

1953a *Tārīkh-e Musalmān-e Pākistān o Bhārat, jild-e dūwum*: *“Taḥrīkāt-e Millī” 1707 tā 1952*, Anjuman-e Taraqqī-e Urdū Pākistān, Karāchī.

1953b *Panjāh Sālah Tārīkh-e Anjuman-e Taraqqī-e Urdū*, Anjuman-e Taraqqī-e Urdū Pākistān, Karāchī.

1953c *Talkhīṣ al-Urdū, ya‘nī Anjuman-e Taraqqī-e Urdū kē Shohrah-e Āfāq Seh Māhī Risālē Urdū kē Sī Sālah Parchōṇ se Behtarīn Maẓāmīn kā Intekhāb, bah Yādgār-e Jashn-e Panjāh Sālah-e Anjuman*, Anjuman-e Taraqqī-e Urdū Pākistān, Karāchī.

1956 *Ma’āṯir-e Lāhōr, Qadīm Lāhōr kē Mashāhīr kā Tadhkirah aur Tārīkh, 413 H./1021 tā 639 H./1241*, Idārah-e Thaqāfat-e Islāmīyah, Lāhōr.

■ファリーダーバーディーの翻訳書

Farīdābādī, Sayyid Hāshimī (translation)

1919a *Tārīkh-e Yūnān*, Maṯbū‘ah-e Dār al-Ṯab‘ Sarkār-e ‘Ālā, Ḥaidarābād (Dakkan). (Original: Bury 1900)

1919b *Mushāhir-e Yūnān o Rūmah ya‘nī Ḥakīm Plūṭārk Yūnānī kī Shohrah-e Āfāq Kitāb Perelal Lāivz (Parallel Lives) yā Siyar-e Mutawāzī kā Urdū Tarjumah,* Maṯba’-e Insṭīṭyūṭ ‘Alīgarḥ Kālij, ‘Alīgarḥ.（プルタルコス『対比列伝』の英訳からのウルドゥー語訳）

1929 *Tārīkh-e Salṯanat-e Rūmah*, Dār al-Ṯab‘ Jāmi‘ah ‘Uthmānīyah Sarkār-e ‘Ālā, Ḥaidarābād (Dakkan). (Original: Bury 1893)

1930 *Yūrap kā ‘Aṣr-e Jadīd, jild-e sivum,* Dār al-Ṯab‘ Jāmi‘ah ‘Uthmānīyah Sarkār-e ‘Ālā, Ḥaidarābād (Dakkan). (Original: Fyffe 1924)

1931 *Ma‘āshī Ḥālāt-e Hind az Akbar tā Aurangzēb,* Dār al-Ṯab‘ Jāmi‘ah ‘Uthmānīyah Sarkār-e ‘Ālā, Ḥaidarābād (Dakkan). (Original: Moreland 1923)

1932a *Islāmī Fann-e Ta‘mīr Hindustān Meṇ*, Dār al-Ṯab‘ Jāmi‘ah ‘Uthmānīyah Sarkār-e ‘Ālā, Ḥaidarābād (Dakkan). (Original: Fergusson 1876)

1932b *Bilād-e Falasṯīn o Shām (‘Ahad-e Ḥukūmat-e Islāmī)*. Dār al-Ṯab‘ Jāmi‘ah ‘Uthmānīyah Sarkār-e ‘Ālā, Ḥaidarābād (Dakkan). (Original: Le Strange 1890)

1932c *Jughrāfīyah-e ‘Ālam, ḥiṣṣah-e dūwum,* Dār al-Ṯab‘ Jāmi‘ah ‘Uthmānīyah Sarkār-e ‘Ālā, Ḥaidarābād (Dakkan). (Original: Marsden and Smith 1921)

1934 *Jughrāfīyah-e ‘Ālam, ḥiṣṣah-e avval,* Dār al-Ṯab‘ Jāmi‘ah ‘Uthmānīyah Sarkār-e ‘Ālā, Ḥaidarābād (Dakkan). (Original: Marsden and Smith 1921)

1936 *Yūrap kā ‘Aṣr-e Jadīd, jild-e cahārum,* Dār al-Ṯab‘ Jāmi‘ah ‘Uthmānīyah Sarkār-e ‘Ālā, Ḥaidarābād (Dakkan). (Original: Gooch 1923)

1937 *Tārīkh-e Inglistān, ḥiṣṣah-e avval*, Dār al-Tab‘ Jāmi‘ah ‘Uthmānīyah Sarkār-e ‘Ālā, Ḥaidarābād（Dakkan）.（Original: Ransome 1907）

1938 *Tārīkh-e Daulat-e ‘Uthmānīyah（tā 1914）, ḥiṣṣah-e avval*, Dār al-Tab‘ Jāmi‘ah ‘Uthmānīyah Sarkār-e ‘Ālā, Ḥaidarābād（Dakkan）.（Original: La Jonquière 1914）

1939 *Tārīkh-e Daulat-e ‘Uthmānīyah（tā 1914）, ḥiṣṣah-e dūwum,* Dār al-Tab‘ Jāmi‘ah ‘Uthmānīyah Sarkār-e ‘Ālā, Ḥaidarābād（Dakkan）.（Original: La Jonquière 1914）

1940 *Hindustān kī Ḥālāt（Bartānī Tasalluṯ kē Qarīb）*, Dār al-Tab‘ Jāmi‘ah ‘Uthmānīyah Sarkār-e ‘Ālā, Ḥaidarābād（Dakkan）.（Original: Owen 1872）

1941 *Tārīkh-e Inglistān, ḥiṣṣah-e dūwum*, Dār al-Tab‘ Jāmi‘ah ‘Uthmānīyah Sarkār-e ‘Ālā, Ḥaidarābād（Dakkan）.（Original: Ransome 1907）

1954 *Tārīkh-e Millat-e ʿArabī*, Anjuman-e Taraqqī-e Urdū Pākistān, Karāchī.（Original: Hitti 1937）

1959 *Ghāziyān-e Tahdhīb*, Akādamī Panjāb, Lāhōr.（Original: Cottler and Jaffe 1931）

1962a *Bābur（Shēr Babar）*, Shaikh Ghulām ‘Alī ēnḍ Sanz, Lāhōr.（Original: Lamb 1961）

1962b *Miṣr: Sarzamīn aur Bāshindē*, Shaikh Ghulām ‘Alī ēnḍ Sanz, Lāhōr.（Original: Mahmoud 1959）

Ḥaidar, Muḥammad, Sayyid Hāshimī Farīdābādī, Muḥammad ‘Abd al-Sattār（translation）

1940 *Dāstān-e Nandkumār o Muwākhadhah-e Sar Ilaijā Impī, jild-e avval,* Dār al-Tab‘ Jāmi‘ah ‘Uthmānīyah Sarkār-e ‘Ālā, Ḥaidarābād（Dakkan）.（Original: Stephen 1885）

Ḥusain, Qāẓī Talammudh o Sayyid Hāshimī Farīdābādī（translation）

1936 *Yūrap kā ‘Aṣr-e Jadīd, jild-e dūwum,* Dār al-Tab‘ Jāmi‘ah ‘Uthmānīyah Sarkār-e ‘Ālā, Ḥaidarābād（Dakkan）.（Original: Fyffe 1924）

Labīb, Mirzā Nizām Shāh（translation）o Sayyid Hāshimī Farīdābādī（revision）

1940 *Ḥikāyāt-e Rūmī, ḥiṣṣah-e avval o dūwum,* Anjuman-e Taraqqī-e Urdū, Dehlī.

■ファリーダーバーディーの翻訳書の原著

Bury, John Bagnell

1893 *A History of the Roman Empire from Its Foundation to the Death of Marcus Aurelius（27 B.C.-180 A.D.）*, John Murray, London.

1900 *A History of Greece to the Death of Alexander the Great*, Macmillan, London.

Cottler, Joseph, and Haym Jaffe

1931 *Heroes of Civilization*, Little, Brown, Boston.

Fergusson, James

1876 *History of Indian and Eastern Architecture*, John Murray, London.

Fergusson, James, James Burgess, and Richard Phené Spiers

1910 *History of Indian and Eastern Architecture*, John Murray, London.

Fyffe, Charles Alan

1924 *History of Modern Europe*, uniform edition, Cassell and Company, London.

Gooch, George Peabody

1923 *History of Modern Europe, 1878-1919*, Cassell and Company, London.

Hitti, Philip Khuri.
1937 *History of the Arabs*, Macmillan, London.
La Jonquière, A., Vicomte de
1914 *Histoire de l'Empire Ottoman depuis les origines jusqu'à nos jours, Nouvelle edition, 2 vols.*, Librairie Hachette, Paris.
Lamb, Harold
1961 *Babur the Tiger, First of the Great Moguls*, Doubleday and Company, New York.
Le Strange, Guy
1890 *Palestine under the Moslems: A Description of Syria and the Holy Land from A.D. 650 to 1500*, Published for the Committee of the Palestine Exploration Fund by A.P. Watt, London.
Mahmoud, Zaki Naguib
1959 *The Land and People of Egypt*, J.B. Lippincott, Philadelphia and New York.
Marsden, E. and Alford Smith
1921 *Geography for Senior Classes*, Macmillan, London, Bombay, Calcutta and Madras.
Moreland, William Harrison
1923 *From Akbar to Aurangzeb: A Study in Indian Economic History*, Macmillan, London.
Owen, Sidney James
1872 *India on the Eve of the British Conquest: An Historical Sketch*, W. H. Allen, London.
Ransome, Cyril
1907 *An Advanced History of England: from the Earliest Times to the Present Day*, Rivingtons, London.
Stephen, James Fitzjames
1885 *The Story of Nuncomar and the Impeachment of Sir Elijah Impey, vol. 1*, Macmillan, London.

その他の文献

■政府関係文書

Annual Administration Report of the Osmania University
1923 For the year 1329 Fasli/1919-1920, Government Central Press, Hyderabad（Deccan）.
1925 For the year 1333 Fasli/1923-1924, *n.p.*, Hyderabad（Deccan）.
1928 For the year 1335 Fasli/1925-1926, Government Central Press, Hyderabad（Deccan）.
Mackenzie, A.H. and Fazl Muhammad Khan.
1936 *Committee for the Reorganisation of Education in the Hyderabad State: Report of the Sub Committee*, Government Central Press, Hyderabad（Deccan）.

■ウルドゥー語文献

Aḥmad, Sharīf
1989 *'Abd al-Ḥalīm Sharar: Shakhṣīyat aur Fann*, Gauhar Pablīkēshanz, Dehlī.
Ḥusain, Qāẓī Talammudh（translation）

1935　*Yūrap kā ‘Aṣr-e Jadīd, jild-e avval*, Dār al-Tab‘ Jāmi‘ah ‘Uthmānīyah Sarkār-e ‘Ālā, Ḥaidarābād（Dakkan）.（Original: Fyffe 1924）

Iqbāl, Muḥammad o Lālah Rām Prashād

1913　*Tārīkh-e Hind*, Munshī Gulāb Singh ēnḍ Sanz, Lāhōr.

Raẓā, Ja‘far

1989　*‘Abd al-Ḥalīm Sharar: Ḥayāt aur Kārnāme*, Prōgrēsiv Buks, Lāhōr.

Sharar, ‘Abd al-Ḥalīm

1925　*Tārīkh-e Islām*（*jild-e avval*）, Dār al-Tab‘ Jāmi‘ah ‘Uthmānīyah Sarkār-e ‘Ālā, Ḥaidarābād（Dakkan）.

1926　*Tārīkh-e Isālm*（*jild-e dūwum*）, Dār al-Tab‘ Jāmi‘ah ‘Uthmānīyah Sarkār-e ‘Ālā, Ḥaidarābād（Dakkan）.

Sarwarī, Taḥsīn

1964　“Maulvī Sayyid Hāshimī Farīdābādī,” *Qaumī Zabān*（Disambar 1964）.

Taraqqī-e Urdū Bōrḍ

1965　“Sayyid Hāshimī Farīdābādī, Marḥūm,” *Urdū Nāmah* 20: 49-52.

■その他言語の文献

Datla, Kavita Saraswathi

2013. *The Language of Secular Islam: Urdu Nationalism and Colonial India*, University of Hawai’i Press, Honolulu.

Hunter, William Wilson

1893　*A Brief History of the Indian Peoples*, Clarendon Press, Oxford.

黒柳恒男

1962　「Abdul Haq とウルドゥ促進協会」『東京外国語大学論集』9, 35-45ページ.

Mill, James

1817　*The History of British India*, Baldwin, Cradock and Joy, London.

Mill, James and H. H. Wilson

1848　*The History of British India*（4th ed.）, James Madden, London.

宮本隆史

2022　「植民地インドの教科書における過去の表象：ムハンマド・イクバール&ラーラー・ラーム・プラシャード『インド史』（1913 年）を読む」『外国語教育のフロンティア』5, 315–29ページ.

Seshan, K.S.S.

2018　“Sectional President’s Address: Educational Progress under Asaf Jahis of Hyderabad（1724-1918）,” *Proceedings of the Indian History Congress* 79: 167-84.